Murata High School 100th Anniversary

# 百年通信

プラス 1 2025.7.8 発行

宮城県村田高等学校 総務部

# 宮城県村田実科高等女学校として創立した 宮城県村田高等学校総合学科

村田高校の歩みは、大正から令和にいたる日本社会の変容を映し出しています。
それは、村田高校が、時々の社会の要請に応えて自ら変革してきた軌跡でもあります。

柴田郡に中学校設置の機運が高まりつつあったが、費用負担の大きさから断念、一方で女子教育熱の高まりを受けて村田町は費用負担の少ない実科高等女学校の設立へ町を挙げて取り組んだ。

☞ 1924(大正13) **「宮城県村田実科高等女学校」開校**

「高等女学校規程」により戦時体制の強化、「武道」「教練」「修練」等が科目になる。

☞ 1943(昭和18) **「宮城県村田高等女学校」に改称**

戦後の学制改革で村田町は全日制高校への移行を考えたが、財政的に困難と判断し、勤労青少年に高校教育の機会を保障する定時制高校を設立することにした。

☞ 1948(昭和23).7.8 **「宮城県村田高等学校【定時制独立校 昼間部・夜間部】」開校**

↳ 村田高校の開校記念日としています

全日制開設へ、新校地の買い上げ・新校舎の建設等の町民の協力をもとにした要望や生徒の請願活動が実る。

☞ 1964(昭和39) **「宮城県村田高等学校 全日制課程」開校** (定時制昼間部は募集停止)

「県立移管促進期成同盟」(委員長:町長、委員:PTA・教育振興会・同窓会役員)の県教育委員会に対する請願活動や職員・生徒・保護者のグランド整地等の奉仕活動等が評価され、県立移管が県議会で議決される。

☞ 1966(昭和41) **村田町立から宮城県県立の「宮城県村田高等学校 」となる(県立移管)**

高度成長の波の中で「工業科」設置の動きは以前からあったが、花形産業として黎明期にあった自動車に視点が向けられ、①車社会に対応できる人間の育成 ②他の高校に負けない特色を持つ学校を目指した。

☞ 1968(昭和43) **「自動車科」設置**

1969「自動車科」1学級➡2学級 「普通科」2学級➡1学級

高度経済成長期を経て、定時制課程(夜間部)の入学者の減少が続き、1979(昭和54)に募集停止となる。

☞ 1983(昭和58).3.31 **「定時制課程」廃止**

自動車産業の技術革新による求人数の減少、地元企業の電気・機械・コンピュータ関係の技能者を求める声。生活技術中心の教育からサービス経済化・情報化・高齢化等の科学的知識習得を目指した教育内容へ。

☞ 1990(平成2) **「電子機械科」「生活科学科」設置、「普通科」「自動車科」 の4学科体制**

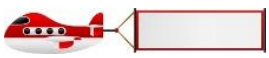
文部科学省からの通知・通達で総合学科は「普通科、専門学科に並ぶ新たな学科」と位置づけられたのを受け、「4学科を発展させる形で統合し、総合学科に改編する」方針を確認。「総合学科では、専門的な教育はできない」と見なされ、「専門的な教育を志向することは、総合学科の趣旨に反する」とされていたが、村田高校は、あえて、「資格のとれる総合学科」への道を選んだ。➡ 村田高校の方向性は、全国の総合学科の指標となる。

☞ 1995(平成7) **「総合学科(単位制)・6系列」設置** ‥‥ 入試倍率仙南地区12校中第1位

【国際教養 自然環境 社会福祉 コンピュータ・ビジネス メカニカル・テクノロジー メカトロニクス】

☞ 2006(平成18) **「総合学科(単位制)・4系列」に精選** ‥‥ 3学級 制服一新

【言語・自然科学 介護福祉 商業実践 自動車(現:機械・自動車)】



# 戦後80年･総合学科開設30年　今一度 戦時下･開設前夜を思い起こすとき

## 戦時下の高等女学校では ‥‥

### 1946(昭和21)年度 卒業生(高等女学校2回生) 談

昭和19(1944)年4月,夢と希望に満ちながら入学した女学校でしたが,戦火いよいよ激しく,毎日が防火訓練,開墾作業,１年のうち冬季を除いて農作業の連続でした。２年生の先輩達が,学徒動員に出発する時,私達には学徒動員の厳しさが分からず,学徒動員に行きたくて,先生に頼みましたが,留守番も大事な務めと言い聞かされました。毎日,開墾しながら肥料(牛糞)をタンカラに背負い,坂道を上り,道路脇の流れる水を飲みながらの作業は,忘れることができません。じゃがいも,さつまいも,大豆などを作りました。それを煎豆にして学徒動員先へ先生が持っていき,先輩達に食べてもらったりもしているようでした。

農繁期には出征家族への奉仕作業も行い,草取り,麦刈り,田植えもしました。

女学校の校舎も兵隊さん達の宿舎となり,私達は小学校の職員室を教室とし,兵隊さん達も草鞋をはき農作業をしていたことも印象深いものでした。どんなに辛いことがあっても戦争に勝つためと,皆は不平一つ言うことなく,一本のさつまいもを分けて食べ合い,頑張ったものでした。

昭和20年8月15日,東山の開墾地において,忘れることのできない玉音放送を聴きました。雑音で何が何やら聞き取ることができずにいましたがた,先生から「無条件降伏だよ」との内容を聞かされた時,皆で泣きながら,これからどうなるのだろうかと心配でたまりませんでした。

## 総合学科 開設前夜 ‥‥

### 1995(平成7)年度 校長先生･教頭先生 談

村田高校は平成になって新校舎に,普通･自動車･電子機械･生活科学の４学科へと充実発展をみた。しかし,各学科１学級のため,進路実現の為の細かなカリキュラム編成は難しく,不本意入学者の他学科への転科にも柔軟性がなかった。

平成５年,各学科の総括をする中,コース制,総合制,学科転換等の可能性を検討･模索していた５月末,文部省から総合学科は小規模校,１学級でも可能であるとの発表があった。総合学科について,検討を進めた結果,その教育理念は「生徒に将来の進路への自覚を深めさせ,学ぶ意義と喜びを取り戻し,個性の伸長を図る」ものであり,本校の諸課題解決に資するとの結論に達し,全職員総意のもとに総合学科移行を決定した。

当初の総合学科構想では,専門学科である電子機械科･自動車科･生活技術科は総合学科に馴染まず,普通科のみの改編を考えていた。しかし,検討を重ねる中で系列の開設科目の中に専門科目を配置し,資格取得をも可能にする総合学科へと変わり,学校全体で総合学科に移行することになった。ただ,課題も多く,知恵を出し合いながら連日夜遅くまで会議を持ち,課題の解決に努めた。

学校全体が一致団結して改編に取り組むことができたのは,教職員が村田高校の発展を願う学校愛,教育愛で満ち満ちていたからであったし,生徒の学習意欲の高揚や将来を見据え,目的をもって学習活動に臨ませる教育の在り方を考えた時,総合学科の理念に教職員が大きな期待を寄せていたからであった。

## 「懊悩(おうのう)」について （内田より）

「懊悩」広辞苑によれば“悩みもだえること。また,そのさま”とある。要するに悩みを頭の中で処理しきれず,体が反応したり,叫んだりしてしまう,まさに「Oh no !」のときだろう。長い人生,誰しも懊悩するときがくる。

昭和〇〇年1月〇日,当時交際していた女性の家を初めて訪れようとした時のことである。K県〇市の駅前,乗車した路線バスがバスプールから大通りに出たところで,頭の禿げたオッチャンが突然飛び出し,通せんぼをしてバスを無理やり止めさせた。乗車ドアを開け,オッチャンを乗せた運転手もどうかと思ったが,オッチャンは,バスの後ろから乗り込み,酒の匂いを漂わせながらウチダの横を通ると,なんと交際相手が「お父さん」と言うではないか。「オッオー」と軽く応じたオッチャン,いや父親は前の座席に座り込んだ。傍若無人なふるまいである。慣れたようすからして,今回だけのことではあるまい。しょっちゅうやらかしているに違いない。交際相手の父親がである。このまま,相手の家に行くべきか,引き返すべきか,ウチダは「懊悩」した。降車するバス停が近づくと,何となくこれが人生の分岐点になるような気もしてきた。「次は〇〇前,〇〇前」のアナウンス,いよいよ選択の時である。‥‥ では,ここで問題。その選択と結果は,次のどれであろうか ？

①明らかに危ない父親である。おそらく家庭もまともではない。この家族には近づかない方がいいので,急に体調が悪くなったと言って,一人で引き返し,交際相手とも別れた。

②予定していた訪問を止めたら,あの父親が暴れだすかもしれない。とりあえず,家には行くが適当な理由を言って,できるだけ早く一人で帰った。常識をもった女性だと思っていたが,自分は父親に似ていると言っていたことを思い出し,実はろくでもない女性なんだと確信し,交際相手とは別れた。

③もう,なるようになれと思い,女性宅で父親に「バスを止めちゃだめですよ」と言ったら,怒り始めてケンカになってしまった。一人で帰ろうとすると「ダメだ,酒を飲んでから帰れ」と訳の分からないことを言い始め,一緒に酒を飲んでいるうちになんだか話が弾み,「泊っていけ」と言われ,結局,女性宅に泊まった。

④行動はまともではないが,面白いオッチャンではないか。何か楽しそうなので,「何でバスを止めたんですか？」と聞いたら,数々の武勇伝を語り始め,ヨイショをしながら話を盛り上げると「話が分かるやつだな,一緒に酒を飲もう」ということになり,結局,飲みすぎて帰れなくなり,女性宅に泊まることになった。

正解は伏せておくが,さて,生徒諸君。君たちは,悩みながらも中学・高校卒業後の進路を選択してきた（していく）。だが,人生の選択はこれで終わりではない。今後も幾たびか岐路に立ち,「懊悩」することもあるだろう。だが,そこで悔いの